
殺した

花浅葱羽羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺した

【Nコード】

N7163L

【作者名】

花浅葱羽羅

【あらすじ】

妻と僕と少年で『殺す』という話。妻は殺して、僕も殺して、少年は殺されて。虚ろな意識はぬるま湯に使ったように麻痺していつていったのだった。

僕が聞いた話によると、妻は人を殺したことがあるらしい。なので、妻に其れを聞こうとしたのだが、妻が何処にも居ないのだ。人に聞こうにも、どうしてなのか皆に声が届かぬようで、はて、困った。と思ったのだが、七歳ほどの少年がこちらに寄ってくるではないか。

なので、僕は少年に妻のことを問うと、少年は

「死んだよ」

と、言うではないか。じゃあ僕はどうすればいいのだ。と呟くと、少年は

「同じところに行けばいいよ。」

と、言った。しかし、死人と同じ所に行けるわけがないではないかと言えは

「大丈夫、あなたも死んでいるから。」

ああ、そうか。ならば、妻はどこだろう。天国か。

「自殺した人は天国に行くけないよ。」

嗚呼、妻は自殺したのか。

「地獄に行くんだよ。」

成る程。確かにそうだ。おや？僕はどうしてここにいるのだろう。

「殺された人はどちらにも行かないよ。」

そうなのか。僕は誰に殺されたんだ？

「妻に殺されたんだよ。」

おや、そうだったのか。

「妻を怨まないの？妻を許すの？」

もちろん。今更どうでもいいと思ったよ。

「行くの？」

そうだね、妻に早く会いたいなあ。

「じゃあ、行ってらっしゃい。」

少年は手を振って背中を僕に向けた。はて、地獄とは罪を犯した人間が行き着く所だった筈だ。生憎、僕は罪になるようなことをした覚えがないのだ。なら、と思い、僕は少年の背中を押したのだ。

嗚呼、急ブレーキの音が耳に痛い。

(後書き)

虚ろな意識の夫や直接的な表現は避けて妻の心情、少年の子供らし
いのにすました雰囲気を出したかったです(過去形)。

文ってやっぱり難しいですね、いくつ書いてもまだまだ書きたくな
ります。「もうこれでいいっもう満足したから書かない。」ってこ
とにならない…満足のいく文が書けてないって事だと思っので、や
っぱり文って難しいです(・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7163/>

殺した

2010年12月10日02時43分発行